初期の京都大学理学部地質学鉱物学教室 と月刊雑誌「地球」について

松 下 進

Early Years of the Geological and Mineralogical
Institute, Science College, Kyoto University and
Monthly Magazine Chikyu-the Globe

Susumu MATSUSHITA

I

上記の教室は大正10年に京大に設置されたが、これは日本で3番目であって、それ以前には東大と東北大にあるだけであった。その翌年から学生の募集を始めた。翌々年の大正12年に私はここへ入学したので、その初期の状態を思い出して書いてみたい。

そのころは、地質学第一講座、同第二講座、鉱物学講座、地史学講座の4講座があった。地質学第一講座は理論地質学講座と呼ばれることが多く、担任教授は松山基範先生で、京大理学部物理の出身で、米国等に2年間留学して着任された。第二講座は岩石学講座と呼ばれ、担任教授は小川琢治先生*で、先生は明治29年東大卒で、ただちに地質調査所に入れ、すぐれた業績をあげ、明治41年に京大文科大学（今の文学部）に新設の地理学講座担任教授として京大へ来ておられた。ところが、上述のとおり、理学部に地質学鉱物学教室ができることになったので、そちらへ移られたのである。鉱物学講座は松原厚先生の担任で、先生は広島高等師範で鉱物学も学ばれ、その後、京大理学部で化学を出られ、2年間欧米に留学された。地史学講座の担任は中村新太郎先生であるが、先生は明治39年東大地質の出身で、おもに朝鮮総督府の地質技師をしておられ、欧米留学のう

え着任された。京大地質教室に珍しい本が多いのは、ちょうど第一次世界大戦の直後で、非常なインフレのドイツなどで、小川先生や中村先生がそういう本を沢山買われたためだと聞いている。

私はこの地史学講座で勉強した。先生は stratigraphy を層序学と訳され、層序を研究するには精細、綿密な野外調査を必ず実行すべきことを強調され、単なる推理を排せられた。先生は朝鮮へ赴任される前に2年間、東京の地質調査所技師をされた。その時、常磐炭田湯本地区の1万分の1の精密な地質図を作られたが、先生はこの仕事を誇りにしておられていた。

京大地質教室がある地区を京大農学部構内と呼ぶのであるが、これは百万遍から銀閣寺へ行く東西の道を境にして京大本部構内に北接しており、私が学生だったころには農学部の大きな建物（これは数年前に、南西にいくらか移動した位置に改築された）のほかには西面する地質教室に向いあって、道路の西に理学部の動物学教室と植物学教室（これらは一つの建物をなしていた）があるだけで、理学部の他の教室は本部構内にあった。これらは昭和の初めに大部分、農学部構内に移って来たと記憶する。そして理学部の化学教室は約20年前にわが地質教室のおもに北側に移って来、十余年前に地質教室が、化学教室とひと続きとして改築された。

前述の百万遍から銀閣寺へ行く道は、私が学生だった頃は幅が狭く、農学部構内から本部構内へ行くために門のほかに地下道があった。この東西

* ノーベル賞の湯川秀樹博士は小川先生の三男で、昭和4年に京大理学部物理学教室を小川秀樹として卒業している。

方向の狭い道は昭和の初めに広くなり、市電が通るようになったが、数年前にこの市電は廃止になった。

私は大正15年に卒業して5年間、満洲（今の中国東北部）におり、昭和6年4月に京大へ教官として戻った。その年の2月12日に木造二階建てだった地鉱教室に火事があり一部が焼失した。翌年5月ごろに応急の建築ができるまで、職員は多くは動物学・植物学教室などに間借りした。この応急の建物はその後、仮りの建物ではなくなり、戦中も戦後もそのまま、私が昭和41年3月末日に定年（63歳の学年末）で退職後、数年たって新しい今のコンクリートの教室ができるまで続いた。

地鉱教室の学生定員は15名であったが、第4回に定員まで入学者があるまでは、入学者数は定員に達しなかったと思う。私が入学した時は7名であった。上治さん、君塚さんは私の1年上、春本さんは同級、下間さんは1年下、田久保さん、館林さん、原口さんは2年下であった。

II

中村新太郎先生は、日本が太平洋戦争に突入した昭和16年12月8日に胃がんのために亡くなられた。享年60歳であった。先生はその年の5月に定年（その頃は満60歳になった当日）で退官しておられた。

先生は朝鮮に8年半の間おられたので、朝鮮の地質、地理に精通しておられたが、ライフワークとして京大在職中に仕上げようとされていたのは平壤炭田の地質構造*の研究であって、先生は京大へ着任されて後大正13年から野外調査を始められ、その後、私ども弟子もお手伝いをした。こうして調査研究は進んだのであるが、その完成を見ずに亡くなられたのは、さだめし残念であられたことと推察される。ご病気が進んで来た時、病床で私に「治るものとは思いますが、もし再起できなくなった時は、どんな形でもよいから、まとめてくれ」とおっしゃった。それで私は小島信夫、池辺

展生の両氏と共に戦後まとめて、地質図と論文を造って印刷公表した**。

私の学生時代には上記の地史学講座には、横山次郎先生が助教授としておられ、静岡県掛川地方の新第三紀層の層序と貝化石を研究中であったが、私が満洲の旅順に5年間いる間に、2年間イギリス等に留学され、昭和5年10月に小川琢治先生が定年退職された後で、地質第2講座の教授になられた。そして戦時中に、地質学第3講座として石油地質学講座ができたので、先生はそちらへ移られ、地質学第2講座担任教授に春本篤夫氏がなられた。

横山先生は貝類や哺乳類の化石を研究され、次々とその成果を発表して来られたが、戦時中に地質構造の理論的研究を始められ、戦後も続け、その成果を発表されていたが、最近その研究成果の一部を英文の単行本（Jiro MAKIYAMA: Tectonomechanics, 1979, 東海大学出版会発行）として出版された。副題として An Introduction to Structural Analysis of Oil-Field Rocks と書かれている。先生は長年にわたって越後油田等の構造解析を可塑理論に基いてされ、粘土を使って実験もされている。

理論地質学講座担任の松山基範先生は全国、朝鮮、満洲の重力測定に精力的に従事された。海上の重力測定には海軍の潜水艦を利用された。先生は重力偏差による重力探査の先鞭をつけられた。このほか先生は早くから岩石の磁性に留意されて、大正15年には兵庫県玄武洞の玄武岩（その時代は洪積世）の磁性を測定して逆帯磁をしていることを発見され、洪積世においては、岩石は現在とは逆に帯磁していたことを、世界ではじめて明らかにされ、さらにその事実は日本各地や朝鮮、満洲でも同様であることを昭和4年に英文で発表された。この業績を以て、昭和7年に学士院賞を授賞された。

松山先生は昭和19年10月に定年退官された。戦後、岩石磁性の研究が世界的に進み、最近の400

* 中村新太郎(1918): 寺洞衝上。地質学雑誌, 25, 45-55.

——(1935): 平壤炭田の地質構造。地質雑, 42, 325.

** Shintaro NAKAMURA, S. MATSUSHITA, N. KOBATAKE and N. IKEBE (1957): *Studies on the Geologic Structure of the Phyongyang Coal Field, Korea.* 日本学術振興会。

万年間に岩石磁性の向きが4回逆転したことが明らかとなり、そのうちの一つに松山先生の名がつけられている。なお先生は、郷里の関係もあって、山口大学の初代学長に昭和24年になられたが、3期在職中、昭和33年1月に山口で白血病のために逝去された。

III

京大地鉱教室のことを書く序に、是非書き残したいことに、月刊雑誌「地球」とその発行母体である「地球学団」のことがある。これらのことは近頃の若い人びとは、あまりご存じないことと思うが、「地球」は教室の初期に、大正13年2月から昭和12年6月まで発行されたものである。この「地球」が地質学や地理学の研究発表や普及のための月刊誌としてなした功績は少くないと思われる。「地球」を作ることは、教室ができて間もなく、恐らく大正11～12年頃に小川琢治、中村新太郎、石橋五郎の3先生が中心となって、話し合われたものと思われる。そして大正12年9月1日の関東地震がこの「地球」の刊行に拍車をかけたものであろう。この地震の直後、小川先生の指揮のもと、先生がたも学生も全部、調査に出かけた。その成果が「地球」の第1巻*を飾ったのである。こうして大正13年2月に「地球」創刊号が出版された。折から地震のため東京からは、地質や地理の雑誌はしばらく発行が困難であったので、「地球」の読者は多かった。しかし、いつまでもそうではなかった。

第1巻には主として関東地震関係の論文、報告が10篇あるが、そのうち6篇が小川琢治先生のもので、「関東地方の地勢及び構造」から始まって、「深発地震論」に及んだ。第2巻は温泉に関するものが多く、小川先生が「温泉に就いて」を書いておられ、第3巻には海岸に関するものが多く、小川先生は「海岸に就いて」を書いておられ、4巻4号は火山号であったが、小川先生は「火山現象に就いて」を書いておられる。

小川先生は行くとして可ならざるはなく、人文地理学のことも沢山書かれた。

*「地球」の場合、巻というのは6カ月を以ていう。

「地球」は「講話」というのがあった。先生方がお得意の題目について、数回に分けて連載されたものである。松山基範先生は「地球が生れるまで」を、中村新太郎先生は「朝鮮地名の考説」を、松原厚先生は「地球を構成する物質と其の分布」を、東京大学教授の加藤武夫先生は「本邦に於ける造山作用、火山作用、鉱床生成の関係 附本邦鉱床の標式」を、日本石油株式会社副社長の大村一郎氏は「石油地質学概要」を、三高・大高（大阪高等学校）教授の藤田元春先生は「屋根概説」を、小川先生は「岩石学用顕微鏡の使用法」を、石川成章先生は「本邦産産物並に鉱床の地理的分布」を連載された。

次に学術的原著論文のおもなものは、第1巻は本間不二男先生の「丹沢山塊の地質構造概観」、中村先生の「朝鮮の奥陶紀層に関する現在の智識」、横山先生の「遠州浜名湖畔に出た旧象と其の化石」が、第2巻には横山先生の「シュミッド半島第三紀層序論」、神津叔祐・益田峰一・自在丸新十郎氏の「間瀬産魚眼石の熱的研究」、小川先生の「地文及地理学上より見たる九州西北部」、木下亀城氏の「黒鉱々床中の螢石に就いて」などがある。

また第3巻には山崎直方先生の「史前時代以来上総東南海岸の昇降に就きて」、辻村太郎先生の「先志摩の海岸地形」、「三浦半島の海岸に就いて」、小川先生の「刀剣の地理学的研究」、上治寅次郎氏の「丹波田倉山火山」、中村先生の「朝鮮の人口と其の分布」、木下氏の「黒鉱々床の角稜質包裹物」、小川先生の「日本紅簾片岩の成因」、江原真伍先生の「小仏古生層の時代如何」、横山先生の「遠江掛川附近第三紀層の層序」、江原先生の「阿波国勝浦郡羽ノ浦町附近のオルビトリーナ石灰岩とイノセラムス層」などがある。第4巻には小川先生の「東亜地質構造論からみた地震現象の説明」、矢部長克先生の「日本白亜紀三角介砂岩中の化石帯」、江原先生の「和泉砂岩層に就て」などがある。

第5巻には小川先生の「科学としての地理学」、恐縮ながら私の「土佐黒滝産下部三疊紀化石に就て」、矢部先生・長尾巧先生の「関東山地山中地溝帯白亜紀の介化石」などがあり、第6巻には

小川先生の「太平洋地域の探検と開発」、早坂一郎博士の「太原系 (Taiyuan Series) に就て (1)」があり、第7巻には小川先生の「地質現象相互関係の解釈法」、松山先生の「重力偏差の分布から見た鹿児島湾周囲の地下構造」、春本篤夫氏の「隠岐島後の火山岩に就て (2), (3)」, 小川先生の「日本群島の地貌に及ぼす地内力の結果」、帷子二郎氏の「地球の大形態成因に関する『楔状説』に就て」、小川先生の「東亜弧状構造線の新解釈」、大橋良一先生の「黒鉱々床の海底成因に就いて」、小川先生の「地震損害軽減の可能性に就いて」、中村先生の「丹後峰山地震に顕はれたる起震線と地弱線」、小川先生の「大陸及大洋地域の弧状輪廓の意義」、新帯国太郎氏の「大連湾海水の観察」、小川先生の「丹後峰山地震の現象と其解釈」、神津先生の「三宅島産灰長石の諸性質」、横山先生の「新義州南東に出た魚化石リコプテラの一新種」、熊谷直一氏の「関東地方の重力偏差」。

「地球」第8巻では、おもな原著論文は、小川先生の「造陸造山両作用の性質」、木下亀城先生の「黒鉱母液果して酸性なりや」、小川先生の「造山作用の地震地質学的解釈」、熊谷氏の「関東地方の重力偏差」、早川千尋氏の「常磐地方白土層の地質時代に就きて」、神津先生・吉木文平氏の「緑色角閃石より褐色角閃石への変化に関する研究予報」、横山先生の「信濃国上水内郡第三紀化石略報」、山口鎌次氏の「出雲鶴峠鉱山産透明石膏の主屈折変化に関する研究予報」、中村先生の「根尾断層に就きて」、中村先生の「朝鮮地質構造論序説」、小川先生の「直線状構造線及び地内力効果の綜覧」、渡辺万次郎博士の「混合液の拡散に基く金属硫化物の分離沈澱」などがある。

第9巻には矢部先生の「北上山地の南端部、牡鹿半島の岩石節理の研究」、横山先生の「静岡県掛川町近傍の地質に就きて」、清水三郎氏の「四国佐川盆地産アンモナイトに就きて」、大橋良一先生の「北日本の火山帯」、小川先生の「北支那先史時代の人類に就きて」、八木貞助氏の「信州横川峡の梯状脈蛇石に就きて」、江原先生の「四国に於ける上部白堊紀層の分布と構造線に就きて」、大橋良一先生の「花岡鉱山の珪鉱中に含まるる火山弾」、神津先生の「三宅島火山噴出物の

研究 (三)」, 本間先生の「信濃中部第三紀層の分類」、清水氏「本邦三疊紀産アンモナイトに就きて」、神津先生・吉木氏「温度の変化に因る黒雲母の屈折率及光軸角の変化」、中村左衛門太郎氏「安政及宝永大地震の震源に就て」、下間忠夫氏「隠岐島前群島に於けるアルカリ粗面岩々脈に就きて」、神津先生・瀬戸氏・上田氏「甲斐国佐野産透輝石の光学性質及温度に対する容積の変化」などである。

第10巻では神津先生ほかの「蛭石について (概報)」, 石川先生の「温泉の湧出曲線」、神津先生ほかの「方解石の加熱線膨張」、本間先生・君塚氏「六甲山地の形成」、中村先生の「花折断層の予察」、原口九萬氏「済州島火山岩中の斑晶及第三紀化石」、済州島アルカリ岩石 (予報1)、春本氏「朝鮮東萊産斑礫岩の鉱物成分」。

第11巻には原口九萬氏の「済州島の火山岩の続き」のほか、本間先生の「信濃における新第三紀層褶曲地帯の特性と其成因」、望月勝海氏の「阿武隈山地の化石準平原について」、春本氏の「経緯鐘台による輝石類双晶の識別法について」、竹山俊雄氏の「紀伊安久川の洪積統」があり、第12巻には小川先生の「火山岩の季晶作用 Hystatocrystallization について」、原口氏の「済州島遊記 (1)」, 小川先生の「東亜地域の概観」、吉沢・笹倉氏の「北海道駒ヶ岳爆発見聞記」、今村学郎氏の「ナポリ湾周囲における地形学的観察」がある。

また第13巻には横山先生の「大阪難波駅半化石」、竹山俊雄氏の「和歌山県田辺付近第三紀層の層序」、園山市太郎氏の「再び石見地方第三紀層中の豆灰について」、野満先生の「明石市の経度天測附鉛直線偏差について」、中村先生の「朝鮮の平均高度について」、原口氏の「済州島火山岩の岩漿分化について」、小島信夫氏の「聞慶炭田地方地質概報」、館林寛吾氏の「紀州由良付近の鳥巢統其他について」、小島氏の「朝鮮聞慶産の *Gigantopteris* 其他について」、野満先生の「我國の経度基準測定の変遷」、などがあり、第14巻には村上政嗣氏の「木津川における侵蝕現象」、宇治川における侵蝕現象」、竹山俊雄氏の「津山盆地の地質概報」、横山先生の「石川富山両県下の第三紀層概観」、原口氏の「方背達石の化学

性質」, 吉村信吉氏の「福島県秋元湖の諸湖における水温及溶解酸素含有量予報」, 吉沢 甫氏の「二上火山研究概報」, 原口氏の「姫島の地質」, 吉沢氏の「北海道根室火成岩中の沸石類の化学成分」などがある。

第15巻には小川先生の「伊豆地震における地盤変動について」, 横山先生の「奈良南方の第三紀層」, 竹山氏の「吉備高原の含化石層雑記」, 原口氏の「肥前相知付近の海蝕洞窟と石仏」, 黒田氏の「奈良春日山の貝類」, 郡場先生・三木氏の「白堊紀和泉砂岩の化石コダイアマモ(新称)に関する考察」などがあつた。

第16巻には塚野善蔵氏の「勝浦盆地の地質概報」, 小野山武文氏の「篠山盆地地質概報」, 早坂先生の「昭和5年12月台南州下に起つた地震について雑記」, 小川先生の「中央日本の洪積世水河作用について」, 横山先生の「美濃上之郷村にて新に発掘されたアストドンについて」, 井上重一氏の「滋賀県高島郡中部地質概報」などがあつた。

第17巻には小川先生の「中央日本の洪積世水河作用について(3-4)」, 私の「関東州金州北西乃至北方の島嶼の地質」, 笹倉正夫氏の「姫川上流沿岸の地質概報」, 吉沢氏の「朝鮮福辰山における若干の観察」, 君塚康治郎氏の「南紀東牟婁郡太地産加里アノソクレースに就いて」, 市川 渡氏の「越中呉羽山及び其西南丘陵地体の地形学的考察」, 春本氏の「奈良三笠山火山の地質」, 上治氏の「筑豊炭田における含古銅石輝石安山岩について」, 横山先生の「大阪府中河内郡堅上地にり見学案内」, 松山先生の「河内堅上地に運動観測の結果について」, 杉山敏郎氏の「紀州有田郡由良町付近に発達する中生層のある新事実について」, 笹倉氏の「姫川中, 下流沿岸の地質並に姫川溪谷の地質構造的意義」, 半沢正一郎先生の「紡錘虫科有孔虫の分類に関する論説の評論」。

第18巻には半沢先生の前記の論文の続き, 君塚氏の「大阪府待兼山産高師小僧」, 私の「志摩磯部村木場の洪積層について」, 西尾 銈氏の「大阪市堺筋を南北に縦貫する断層について」, 春本氏の「南大和の小火山」, 私の「関東州大和尚山の構造について」, 鳥山武雄氏の「筑紫平野及其の四近の地質に関する造構史的考察」, 上治氏の「地質

学上より見たる恵那山前山の崩壊と水害について」, 小川先生の「中央日本氷成堆積物の分布」などがある。

第19巻には清水三郎・神保 恵両氏の「愛媛県東宇和郡魚成村田植村田穂上組下部三疊紀アンモナイトについて」, 春本篤夫氏の「鬱陵島火山抛出物に含まれるケルスウト角閃石及びビジオン輝石について」, 小野山武文氏の「金沢市並に富山県石動町付近の第三紀層」, 鶴川平八郎氏の「大和穴虫産の鋼玉について」, 笹倉正夫氏の「斜長石を識別する晶帯法の紹介」, 大炊御門氏の「志摩木場の洪積世化石について」, 鳥山武雄氏の「北九州における近世地殻変動について」, 井上重一氏の「和歌山県有田川流域の地質」, 上治氏の「九州北松浦炭田における蛇の目層について」, 吉沢氏の「福辰山霞石閃長岩中の長石類」, 私の「関東州旅大山地の河岸段丘について」がある。

第20巻には私の「平壤北東方の層序及び地質構造」, 今井市郎氏の「信濃南佐久郡の異剝岩」, 大炊御門経輝氏の「渥美半島の洪積層」, 竹山俊夫氏の「越前丹生山地北部の第三紀層」, 池辺展生氏の「琵琶湖西方の古琵琶湖層」, 西尾氏の「京都市四条道を通ずる東西断面」, 竹山氏の「伊吹山及び醒井附近の古生層」, 吉沢氏の「福辰山産霞石閃長岩中のヘースチング石」, 竹山氏の「吉備高原並に其の附近の洪積層とその変位」, 上治氏の「大阪府豊能郡麻田村産旧象牙化石と其の層位」などがある。

第21巻には小川先生の「中央及び東北日本の氷成堆積物分布について」, 八木次男氏の「北上山脈入谷付近の Probable glacial deposits について」, 広瀬正資氏の「琵琶湖東南岸の地質」, 大炊御門氏の「浜名湖畔伊佐見村の洪積化石に就て」, 高橋純一氏の「水河礫と擬水河礫」, 大木謙一氏の「四国剣山付近の地質」, 大炊御門氏の「東京市豊島区目白町に於けるさく井の結果について」, 竹山氏の「宮崎県佐土原町仲間原の海成洪積層」, 鶴川平八郎氏の「京都府相楽郡笠置村産電気石について」, 横山先生・君塚氏の「長野県南佐久郡樽ノ沢産蛙化石」, 鈴木好一氏の「紀伊半島東南部の含炭第三系宮井統の地質時代について

て、横山先生の「遠江二俣町付近第三紀層及び地質構造概観」、上治氏の「山城国相楽郡中和東村柚田における電気石の産状」、鶴川氏の「朝鮮黄海道黄州郡天柱面の黄鉄鉱後の褐鉄鉱」などがある。

第22巻には竹原平一氏の「関東州平山付近の地質」、初田甚一郎氏の「本邦花崗岩のラヂウム含有量（予報）」、上治氏の「神戸市北方花崗岩地を縦断する顕著なる断層につきて」、池辺展生氏の「滋賀県甲賀郡東部の中新統」、中村先生の「近畿中部における地質構造」、大炊御門氏と池辺氏の「上総東金町及び大網町付近の貝化石層」、森下正信氏の「安山岩の地質構造」、竹原平一氏の「朝鮮黄海道黄州向斜地の地質」、大炊御門氏の「瀬又産 *Tellina salmonea* (Carpenter) について」などがある。

第23巻（昭和10年1月—6月）には、松山先生の「ロ号第57潜水艦による日本海溝上の重力測定」、横山先生の「四倉及びマチガルの浅貝階貝化石」、上治氏の「北松浦炭田における夾炭層の層序略説」、大村氏の「ボルネオの第三系」、今村久治氏の「富山県小矢部川床に露出する砂岩々脈について」、大炊御門氏の「北海道釧路国山越郡ボンセイヨウベツ及び夏路の瀬棚統貝化石について」、横山先生の「信濃別所頁岩に見出された中新世海豚化石」、滝本清氏の「三重県一志郡地方の新生界」、私と小野山武文氏と前島次郎氏の「朝鮮黄海道鳳山炭田の地質と化石」、岸彰忠氏の「京都における長周期の脈動」、小野山氏の「南洋統治領内主要島嶼の地形と地質雑観」がある。

第24巻には、横山先生の「北朝鮮の明川中新統」、小野山氏の「南洋統治領内主要島嶼の地形と地質雑観（その二）」、前島俊郎氏の「平壤府付近の地質（予報）」、清水三郎・小幡忠宏両氏の「小林貞一学士の南朝鮮奥陶紀頭足類研究に対する批判」、横山先生の「静岡地震の地質学的見解」、大炊御門氏の「茨城県稲敷郡阿見村及び舟島村の貝化石層」、本間先生の「口永良部島第一熔岩中の斑晶をなす斜長石の累帯構造について」、私の「岡山県真庭郡川上村及八束村に於ける珪藻土の産状」、小野山氏の「高岡市並に石川県津幡町付

近の第三紀層」、本間先生の「桜島噴火の予想」、初田甚一郎の「有馬温泉の湧出量」などがある。

第25巻には、上治氏の「兵庫県有馬町西南第三紀層の構造」、小林貞一氏の「原始頭足類の系統分類論解説（1）～（5）」、上治氏の「神戸市北西丸山衝上断層について」、中村先生の「西部平壤炭田の地質概説」、山内信雄氏の「高知市北方のトリゴニア砂岩層」、上治氏の「六甲山塊南麓における新生低地の発達に関する考察」、清水・小畑両氏の「満洲国奥陶紀産 *Nybyoceras Endo* について」、井出淳一氏の「長野県野辺山原における象歯化石と其の地層について」、大村一蔵氏の「チャパの第三系」、上治氏の「六甲山塊における新生代地層と其の構造」、小谷秀一氏の「和歌山県田辺湾海岸の泥岩岩脈について」、園山市太郎氏の「島根県における岩石地質学的著例の摘要とその考察」、池辺氏の「魚成衝上について」、村上政嗣氏の「流出量推定の一方法と昭和十年の鴨川洪水」などがある。

第26巻（昭和11年7月～12月）には、滝本清氏の「滋賀県犬上郡霊仙山附近の地質構造」、竹原平一氏の「門司市及山口県厚狭町付近の硯石統」、吉沢氏の「朝鮮福辰山産ヘースティング石について」、田久保実太郎氏の「朝鮮産十字石について」、竹原平一氏の「福岡市外香椎宮付近の地質」、三木茂氏の「明石旧象化石含有層内の植物化石」、山内信雄・平田茂留両氏の「土佐国伊野盆地における上中部三疊紀層の発見」、池辺展生氏の「千葉県大谷流の化石貝層」、大炊御門・鈴木好一・坂倉勝彦・池辺四氏の「千葉県平山の化石層」、中村先生・私・館林寛吾氏の「京都西山の地質」、鹿間時夫氏の「兵庫県明石郡大久保村西八木発見の獸類足跡化石」、大炊御門氏の「東京市江戸川公園の貝化石層」、松山先生の「満洲国内の重力測定」、竹原平一氏の「砥川村上砥川沖積層下の第三紀化石」などがある。

第27巻（昭和12年1～6月）には、松山先生の「城崎温泉について」、大炊御門・池辺両氏の「千葉県君津郡富岡村滝ノ口の貝層」、上治氏の「六甲山四近の第三紀層と地質構造見学要項」、横山先生の「神戸付近第三紀層見学案内」、田久保・鶴川両氏の「南大和の鉱床見学案内」、前島・滝本

両氏の「平壤炭田炊北附近の地質概報」、田久保氏の「朝鮮蘭谷産十字石について」、大炊御門氏の「千葉県岩富町及び佐倉町附近の貝化石層」大炊御門氏の「千葉県岩富町及び佐倉町附近の貝化石層」、上治氏の「石炭各部の岩石学的名称について」などがある。

「地球」に発表された地質学や自然地理学の原著論文・報告の主なものは以上の通りであるが、その他に人文地理のものもあったし、「地理教材としての地形図」というのがあり、諸地の地質地形の話が、初めの頃にはあった。「談叢」というものがあり、小川先生が如舟というペンネームで「水滸伝の地理」、「支那小説の地理」というものを書いておられる。

そのほか新著紹介と雑報があり、初めの頃には

質疑応答というものもあった。また「摘録」というのがあり、重要論文の抄録があったことがある。

「地球」の編集は中村先生と藤田元春先生がしておられた。月一回中村先生の部屋でしておられた様である。藤田先生は苦学して文学部地理を卒業して助手をされ、後には旧制三高教授になられた。博覧強記、速筆の有能な人であった。

「地球」は「地球学団」というのが発行母体で、印刷出版は初めは京都の内外出版という会社でしていたが、後で大阪の成象堂という所に変った。

「地球学団」は「地球」の発行以外に、地学講習会を年一回開いた。それに伴って見学があったことがある。場所は京大でするのが常であったが、遠く岡山県津山でしたこともあった。

(1983年6月18日受理)